まえがき

『魏志倭人伝』^{ギシワジンデン}という古代の史書に記された《邪馬台国》^{ヤマタイコク}とはいつたい日本のどこにあつたのか、また女王（卑彌呼）^{ヒミコ}とはいつたい誰のことなのか……これは、多くの日本人をひきつけてやまない謎であり、おびただしい冊数の書物が出版されている。

私も人なみにこの問題に興味をもってきた。

だが私は、近現代史の書を著したことはあつたが、古代史の学者ではない。

だから興味はあつても野次馬的であり、自分がこのような書物を執筆するとは、すこし前までは考えてもみなかった。

しかし、数年前に考えが変わつた。

それはつぎの三つの理由による。

- 一 「年輪年代法」という科学技術的な方法が日本でも確立して、古代遺跡の年代が確定可能になつたことを、倉橋秀夫『卑彌呼の謎 年輪の証言』（平成十一年）によつて知つたこと。同時に奈良県の纏向遺跡^{マキムクイセキ}の発掘状況を知つたこと。
- 二 現在の小中高校の歴史教育において、『古事記』^{コジキ}『日本書紀』^{ニホンシヨキ}『万葉集』^{マンヨウシユウ}といった、古代日本人の「心」が刻み込まれた古典が不当に軽視されていることを知り、これら古典の重要性や面白さを戦後生まれの人たちに訴えたいと思いはじめたこと。

（アメリカの教科書には日本神話が日本の教科書よりくわしく書かれているという話が、その教科書にある天孫降臨^{テンソンコウリン}の図とともに記されているのを読み、愕然^{ガクゼン}とした）

三 昨今のテレビ報道などから、古く縄文弥生時代から続く日本の文化的伝統である神社（神道すなわち先祖や自然への崇敬の念）を一宗教法人視する誤解や曲解が蔓延していることを知り、残念に思ったこと。

そして、二年ほどかけてまとめあげたのが、本書である。

各章のトビラ裏にある『万葉集』からとった和歌とその現代語訳は、旺文社版の『万葉集全三巻』を主に参考にした。また『古事記』や『日本書紀』（本書では後者に重点をおいている）からの引用は、小学館の『新編日本古典文学全集』を参考にした。

年代の表記法については、明治以後はなるべく元号を用いたが、それ以外は西暦とし、皇紀は使用しなかった。もし皇紀を知りたければ、西暦に六六〇年を加えればよい。

正字と簡略字体の使い分けについては、人名・神名はなるべく正字とし、それ以外は常用漢字を用いた。そして漢字にはなるべくフリガナを付した。

本書は汗牛充棟の感のある《邪馬台国》問題の書群にまた一書を加えるものにすぎないが、極力資料性を重んじたつもりである。

また個人的なあるいは飛躍した想像はなるべく慎んだ。
楽しんでくだされば幸いである。

石原藤夫